

トランス嫌悪言説の中で性的マイノリティとして教えること

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻

郭 立夫

非常勤講師の仕事が大変だ。その理由は一般的に労働条件が悪だけでなく、私自身が性的マイノリティとしてジェンダー論を教える時に「絶望」を感じるからです。むしろその「絶望」の方が私のストレスになっているかもしれません。

2022年の春学期、私は非常勤講師として二つの大学で「トランスジェンダー」をテーマにしたジェンダー論の授業の担当に着任しました。トランスジェンダーをテーマに選んだ背景には、2021年の東京オリンピックでニュージーランドの重量挙げのトランス女性選手が女性として出場したことが中国と日本のSNS上で炎上したことがあります。男性としてトレーニングされてきたトランス女性選手はシスジェンダーの女性選手の「脅威」として語られ、まるで「加害者」であるかのように批判されました。それを目にした私は、一人の研究者、そして大学の教員として授業を通じて何かできることはないか、模索したいと強く感じました。しかしそれは簡単なことではなく、本エッセイを書いている今、春学期が始まってもう1ヶ月ほど経っていますが、いまだに学生のコメントに「シス女性を守るために、トランス選手の試合参加は認めてはいけない」などの意見が見られ、その難しさを感じています。

英語では女性の権利を掲げながらトランスの権利を否定する人たちを「TERF (Trans Exclusionary Radical Feminists)」と呼んでいます。この言葉の略称が多くの問題（例えばこの人たちはフェミニストといえるのかどうか）を生むのは言わずもがなで、もはやこの言葉を使うこと自体が大変な物議を醸すようになってきています。特にトランス嫌悪的な発言をする人たちはこの言葉を常にトランス活動家たちによる自分に対する「攻撃」だと認識し、その言葉の使用を拒否し、強く反対しています。彼らは女性の権利保護を掲げつつも、フェミニズム思想と運動が何十年もかけて作り上げてきた「ジェンダーもセックスも社会的・政治的に構築された」という思想を否定し、「女性とは誰か」というフェミニズム思想の根本的で定番の質問に対して、安易な生物決定論で答えているのです。

今、TERF についての研究は欧米を中心に展開されています。それらの研究から分かるのは、TERF の概念は政治的・宗教的保守勢力から大きく影響を受けているということです。Gender Critical であり、同時に TERF 思想を掲げる活動家たちは多くの場合女性が主体となっていますが、不思議なことに彼女たちは政治的な保守勢力（多くの場合はこれまで女性運動に抑圧的な態度をとっていた政治的・宗教的勢力）と連動しており、女性運動をこれまで抑圧してきた保守勢力とも手を繋ぎ、今やトランスジェンダー女性を排除しようとしているのです。

一方東アジアでは、欧米でのこうした活発な動きに比べると学術的な研究がまだまだ不足しています。実際、韓国的女性運動をまとめた『根のないフェミニズム』という本では、「ゲイとトランス女性はジェンダー・イデオロギーのカルトであり、トランス男性こそ本当の女性だ」というあたかも誰の性

自認も承認しないような発言すら見られます。そしてその本は日本語にも翻訳され、今まさに販売されているのです。

私は 2021 年のオリンピックの事件を契機にプログラミング言語を学習し、Twitter と Weibo で調査を行いました。そこから分かったことは、中国と日本のトランス嫌悪的な言説も各国の保守勢力と緊密に連動しているものの、イギリスやアメリカの活動家がフェミニズムや女性の権利を主張し自らのヘイトスピーチを合理化しようとするのに対し、日本や中国のトランス嫌悪的な言説はあくまで「生物学的」、つまり科学言説に論拠している、ということです。もう少し詳しく見てみると、中国では元アメリカ大統領トランプ氏の発言を引用し、トランス排除を合理化していますし（Weibo におけるトランス嫌悪的なコンテンツではトランプ支持の内容が最も多かった）、日本は中国よりも「女性の権利」を掲げる声が大きいものの、生物学やルールの公平性などそもそもジェンダーの観点に触れない言説が圧倒的に多いのが印象的です。そして、それらの言説はトランス批判を契機に、LGBT とフェミニズムを左翼勢力とし、右翼こそ日本を救うものだとする典型的な「ネトウヨ（インターネット上で活動する右翼団体）」言説が多いと思われます。そして、三分の一程度の割合で、中国の陸上選手に関するデマが見られます。つまり、日本のネットにおけるトランス嫌悪は嫌中とも連動しているのです。まだまだ研究をする余地がありますが、トランスジェンダーに関する議論が東アジアでもジェンダー・ポリティクスを考える上で必要不可欠なものとなっていることは間違ありません。

冒頭のエピソードに戻しましょう。私自身も性的マイノリティなので、ジェンダー論を教えること、とりわけトランスジェンダーに関する知識を教えることとは自分自身の再確認でもあります。教えているときに感じた「絶望」とは多分自分の自己再確認が学生によって疑問視されていると感じたからかもしれません。学生から批判的な意見が届くたびに、私は怒りで震えてしまいます。しかし、その怒りこそ、私を動かすものなのです。良い意味でも、そして悪い意味でも。